祥は法律関係の翻訳をおしつけられて、いわば明治政府につかいころされた。こういう経験のなかで、「権可変学不易」といった人生観が一族にできあがっていったのだろう。だから、学者同士が身をよせあって、うちにまた学者をそだてていく、という姿勢ができあがったのである。それは環境と遺伝との相乗作用であった。

実は、戦前内村祐之教授から日本画の狩野家の遺伝学的研究を命ぜられた津川武一氏は、門下の優秀な人を娘に結婚させ、子は幼時から日本画のなかにそだつ、このことが狩野家をつくりあげた、との結論に達した。この結論は遺伝説を期待した内村教授の気にいらず、自分がうとんぜられる原因の一つになったと、津川氏はわたしにかたられたことがある。箕作山塊形成についてのわたしの見方は、この津川氏にまなんだものである。

（一九九四年一二月例会）

紹　介

医療人類学研究会編『**文化現象としての医療**』

本書は、便利で、刺激的で、いくらか危険な医療人類学の用語集である。

ＤＮＲ、医療化、ヘルシズム、身体化、ノーマライゼーション、スティグマ、文化結合症候群、ロイヤル・タッチ、メディカル・ファッション、カニバリズム、エルステ、アサイラム、ダブルバインドなどという言葉を聞いて、何のことか理解できる人が、医療関係者を含めてどのくらいいるだろうか。

本書では、これらを含めて全部で一〇〇の用語について、医療人類学研究会の新進気鋭の一三人のメンバーにより、解説がなされ、またそれをキーとして、医療とそれをとりまく時代が読み解かれている。

医療人類学は、もともと第二次大戦後、発展途上国での保健医療を進める目的で欧米を中心にして始まり、一九七〇年代に大きく発達した領域である。研究対象は先進国の医療をもカバーするようになり、その文化的社会的側面について研究している。日本では、一九八〇年代から動きがあり、それ以前からの文化人類学者、主に米国でトレーニングを受けた研究者、さらに若手の医療関係者などを中心に活動がなされているが、医療社会学、医療地理学などと同じく、そのアイデンティティーがまだ十分には固まっていない。

医療人類学研究会は、当時の大阪大学の中川米造氏に関係する関西の若手の研究者によって一九八八年に作られ、そのニュースレターとして隔月刊の「医療人類学」が発行された。その中で「えちもろじー」として毎回掲載された用語の解説が本書の発端である。今回の一〇〇語の内、七九語は加筆修正されたり新たに書き下ろされたもので、他は「えちもろじ

ー」からの転載である。

一、先端医療の解剖学（一三語）、二、疾病の地政学（二七語）、三、医療の考古学（二三語）、四、病院の生態学（一九語）、五、ジェンダーとセックスの生理学（五語）六、「精神医療」の病理学（六語）、七、くすりの社会学（七語）にグルーピングされ、それぞれについて、用語の歴史的な解説とそれが用いられた環境が述べられ、用語によってはそれに医療人類学者としてのワサビの利いた批判がつけ加えられている。たとえば、「インフォームド・コンセント」の解説では、「だが、患者が医学情報に近づけば近づくほど、**生物医学**の価値観にのみこまれ、それでいて専門家対素人という関係は温存されるという仕組みこそ、注目されるべきである」というのも、いかにも医療人類学者らしいコメントで刺激的である。

各語は、四頁ないし二頁にコンパクトにまとめられ、大体はわかりやすい。右記した引用文にあるように、他で独立した用語として取り上げられる用語は太字で示されていて、そちらも読むことによって、情報がネットワーク化して理解が深まる。ベストセラーになった、中村雄二郎の『述語集』（岩波書店、一九八四年）の副題に「気になることば」とあるが、本書も医療において「気になる用語」を手軽に理解するのに用いることができて便利である。

ここで、用語の内、約半分がもともと外来のものであり、適当な日本語がなくカタカナが用いられているものも多い。またそれらのうちには欧米でも新しい用語もある。グループ別に「解剖学」「地政学」などとひらがなでルビが振ってあるのも、この領域が元々欧米で発展したことを示すものと思われる。現在、文化現象としての医療を理解するには、このような「キーワード」が必要になってきているともいえる。

但し本書の欠点として、解説が研究者自身の研究にもとづいては書かれていない、つまり実体に即していないものがあることがある。

私は、以前ＷＨＯに勤務しているときにニューズレターをとり始め、マニラに送ってもらっていた。私は、伝統医学というプログラムを担当していたが、各地の文化と密接な関係を持つ領域である、ときどき若い医療人類学者とも討論することがあった。人文科学は私にとって新しい分野であり、討論の中で出てくる考え方を理解するのに、面倒な英語の医療人類学の原本を読み通すのではなく、ニューズレター中の「えちもろじー」が役だったことが何度かあった。一方、本書の「ＷＨＯ」を見てみると、「ＷＨＯは保健医療政策における近代的イデオロギーの生産・展開の場として機能している」とある。この手の批判は、私がＷＨＯ在職中に医療人類学者からしょっちゅう聞かされたものである。医療人類学は批判のための学問であるともいわれるが、無責任な、現場を知らない、ステレオタイプ化した批判を聞かされると、全くその通りと思えてきたものだ。

これは、現在私の関係する臨床薬理学に関連する用語についてもいえる。たとえば、「二重盲検試験」では、「厚生省は

この第三相において、二重盲検試験を製薬会社が実施することを義務づけている」、「二重盲検試験において、統計的に有意な差を期待するためには、試験薬の**生物医学**的な薬効以上に、より多くの被験者をも文字通りかき集めなければならない」など、なぜおかしいかの詳しい説明は省くが、実体としての「二重盲検試験」を知らず、よく理解していないことが見えてしまう。つまり、それぞれの用語の解説にはその質にバラツキがあり、内容がその正確性においてもいくらか危険なところもあるのである。

おそらく、私以外にも、「文化現象としての医療」のうち「医療」そのものに携わっている人にとっては、本書の内容に、ある種の距離感、「外野」からの批判といった感じを受けるかもしれない。その様なときには、各語に適宜ついている文献に直接あたってみると良いかもしれない。

ニューズレターは当初のB5判が突如A4判に変わったり、発行が遅れたりして、後で振り返ってある用語を探そうと思ってもなかなかでてこないようなこともあった。今回このような本にまとまり大変使いやすくなった。ニューズレターは一九九二年に通巻二〇号で発行が休止したようである。一九八〇年代後半は医療人類学という領域が、ディシプリンとして日本に定着していく時期であり、日本の若い研究者が勉強熱心に、世界の状況に鋭敏に反応した、その軌跡が本書に現われているともいえよう。

（津谷喜一郎）

〔メディカ出版・吹田市広芝一八―二四、電話　〇六―三八五―六九一一、B6判、三七六頁、定価二〇〇〇円〕

名古屋大学医学部整形外科同門会編集

『名倉重雄伝』

本書は、東京大学整形外科創始者田代義徳教授の門下であり、九一年の生涯を近代整形外科に捧げられた名倉重雄先生（一八九四―一九八五）の生涯を、門下の方々、特に愛弟子村地俊二博士が代表となってまとめられた二六六頁にわたる名倉重雄先生の伝記である。日本において整形外科学が始めて開講されたのは一九〇六年東京大学整形外科初代田代義徳教授が第一外科スクリバ教授の門より分れてドイツ留学の後作られたのである。名倉重雄先生はわが国でも有名な整骨接骨家の御出身である。名倉家は一四九五年の北條早雲の時代からの歴史を持ち、有名な千住名倉骨つぎ時代から石黒直悳氏の時代はどうしても西洋医学でなければならないとの言により、千住八代目の長子名倉重雄先生が始めて西洋医学の中で接骨を扱う整形外科を志され、府立一中、一高も経て大正八年東京大学医学部を卒業されるや躊躇なく整形外科を選び、田代教授の門下に入られたのであるが、本書にはその間の経緯がくわしく述べられており、ことに感動を呼ぶのは、田代義徳先生の創基された整形外科教室に入られたのは、名倉家が整骨家の家であったからではなく、初代田代先生の大人物の人柄を慕って入局されたというくだりである。